狼よ、はなやかに翔べ

藤原審爾

狼よ、はなやかに翔べ

藤原審爾

講談社

狼よ、はなやかに翔べ
昭和四八年一二月八日第一刷発行

著者——藤原審爾
© Shinji Fujiwara 1973, Printed in Japan
発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—三　郵便番号一二三　電話東京〇三—九四五—一二一一　振替東京三九二〇
印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——株式会社国宝社
定価——七八〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえします

0093-126371-2253（0）　（文1）

目次

狼よ、はなやかに翔べ――5
黒豹よ、魔神のごとく襲え――75
赤い人喰熊――133
山犬たちが吠える雪夜――191

装幀——横山明
依岡昭三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

狼よ、はなやかに翔べ——藤原審爾

狼よ、はなやかに翔(と)べ

太郎はその岩の上で腹ばいになり、きちんと揃えた前肢のうえに、精悍な顔をのせ、凝っと獲物を待っていた。

夜明け前でその山峡の底にはまだ夜がとぐろをまいており、あたりは暗く森閑と静まり返り、わずかに朝靄だけがゆるやかにうごめいていた。

太郎は軽く目を閉じ耳を立てながら、もう一時間ばかりも野鹿が通りかかるのを待っていた。あわても焦立ちもしないで凝っと夜明けを待っていた。夜が明ければすぐに野鹿たちがこの岩の下を通って一粁ほど先の川辺へ、水をのみに出かけるのである。

太郎は七日前、両白山地のはずれの千回沢山の不動山の峡間で、十頭足らずのその野鹿の群れを見つけ、毎日、様子を見にきていた。野鹿の群れはゆっくり北西へむかって移動しており、やがて美濃俣丸を越え、太郎の棲家のある日野川の上流へ入っていった。二日前のその日、野鹿の群れが自分の縄張りへ入った時、太郎は突然名状しがたい昂ぶりに襲われ、野鹿の群れの中へ躍り込んだ。逃げおくれた仔鹿へ飛びかかり、夢中で後頭部を一ト咬みし、仔鹿を殪してしまった。太郎は仔持ちの牝狼なのだが、生後数日経ったばかりの頃から、山窩の作爺に育てられ、餌を与えられたせいで、ほんの二三度しか生きた獣を

殪したことがなかった。やっと走りだせるようになった頃、太郎は迷い込んだ穴の中で仔狐とぶつかり、それをくわえて母親の作爺の許へもどってきた。太郎は誇らしげに死んだ仔狐を土間へ置き、その体へ前肢をかけ、天を仰ぎ、

うおーう、おんおん

と鳴いたものだった。しかし板の間の炉端で繕いものをしていた作爺は、太郎をほめるどころか、矢庭に土間へ飛び下りてきて、いきなり太郎の首ねっこをつかみ、手早く四肢をひとまとめにして縛り、梁に吊して耳もとでもの凄く太郎を呶鳴りつけた。むろん最初の獲物の仔狐は、太郎の目につかぬ場所で始末されてしまった。それで太郎は生きたものを襲うとひどい目にあうことを知ったのだが、それを不自由とは感じなかった。作爺はすぐれた猟師で、そのうえ独特の罠を仕掛けていて、獲物に不足することがなかった。獲物は皮をはぎ、あとを頃合に切って、それを穴の中へ貯めておき、太郎がほしがるたびに与えてくれた。それゆえ太郎は飢えたことがなく、狩りをする必要もなかった。二年前の冬の最中、六歳になった太郎は、ある夜、牡の狼の叫びを聞くうち、抵抗しがたい衝動にとり憑かれ、一ト月余りも山から山を牡の狼たちの家族と倶に徨いつづけたのだがそのときも、生きた獣を襲わず、他の狼たちのたべのこしをあさっただけだった。そして衝動がおさまると、鈴鹿の神崎川の上流から太郎は飢えさらばえながら六十余粁の山々を走り辛うじてわが家にたどりついた。再び平穏な日々がすごせるようになり、たちまち太郎は元気な体にもどったが、生れてはじめての長い旅は深い傷を遺していた。その夏の終りに太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

は五匹の仔たちを、裏山の横穴の中で産んだけれども、間もなく次々に仔たちは死に、牡の仔一匹しか育たなかった。

二日前の野鹿を襲わずにいられなかった衝動は、多分仔どものチヨに餌を運ばなければならぬ深い欲求が、埋もれていた太郎の本能をよびさまし、そこに炸裂したものなのだろう。太郎は跳躍し、美しいフォームで十米あまりも一直線に飛び、駆け逃げて行く仔鹿へ襲いかかった。後頭部へ咬みつき、その一ト咬みでたやすく仔鹿を殪したのだった。瞬間太郎は激しい快感におそわれ、勝利の雄叫びをあげかけた。そこで突然太郎は本能との交信が絶えたようになった。太郎は仆れた仔鹿のまわりをぐるりと歩いた。太郎は他の狼達がこういう獲物をどうするかを知っていた。がぶりと腹へ噛みつき、臓物をまずすりたべるのである。太郎は朝からこの野鹿の群を追いまわしており、空腹にもなっていた。太郎は一度がぶりと腹へ噛みつこうとした。それが飢えを一層刺激した。ほとんど同時にその高まった飢えがはっきり帰心に変った。太郎はがぶりと一ト咬みして腹部をくいちぎると、たちまち飢えをいやす餌を求めて一散にわが家へ帰っていった。そして夕ぐれわが家へたどりつき、作爺からたらふく餌をもらうと、小屋の横手の崖の三尺ばかりの高さのところにある横穴へ入り、チヨを遊ばせながらぐっすり眠りこんだ。やがて日が暮れ、真夜中すぎると、太郎はぱっちり目をさまし、むっくり起きあがり、それが昨夜からの予定の行動のように、悠然と横穴から出ていった。そして一時間ばかり前から、この岩の上で太郎は待伏せをしはじめたのだった。

太郎はしかし別に飢えてもいなかったし、殺戮の快感の虜になっているわけでもなかった。野鹿の群れがいるから、来なければならないのであり、ここを野鹿の群れが通ることがわかるのは、ここへ来るためなのであり、太郎はそれへ従っただけだった。

そうした自然そのものである太郎の上でやがて空が白みだし、鳥たちがぽつぽつ囀りはじめた。静かに徐々に夜が明け、あたりの山々の頂きが夜の中から現われ、急な千米近い山の斜面の麓の岩肌も見えだした。太郎がいる岩の上のまわりは鬱蒼たる森林の斜面で、露呈したその岩山と森林との間に、四米ほどの幅の岩肌と紅葉した灌木と青草の帯状の部分があり、それが斜め左手の森林の中へ消えていた。もし雨が降ればその帯状の部分は川になり、尾根からの流れる雨水があふれながら、彼方の日野川の源流へながれこむのだった。そしてその奔流の通路は、太郎の目の下で二叉になっており、その一つは岩の一間あまり下を岩山ぞいに心もち迂回するように、右手の森林の朝靄の中へ消えていた。

束の間太郎の猟犬よりはるかに鋭敏な嗅覚が、風上からの野鹿の匂いをいち早くとらえた。太郎の耳だけがわずかに動いた。

ほんの数秒の後、その右手の森林の出口のところへ、一頭の年老いた牝鹿が白い朝靄の中から、ひょっこり姿を現わした。牝鹿はすっかり用心深くなっており、広い道へそこから出て来ようとしなかった。今日の太郎は野鹿の群れをおびやかさないよう、その森林のあたりへまったく近寄らなかったのだが、古い匂いがあちこちに残っているらしく、老いた牝鹿はすこぶる警戒していた。首をひょいと右へむけたり左へむけして、注意深くあた

りを見廻した。もとより岩山の太郎のほうも眺めたのだが、黒っぽい灰色の太郎の体は、岩よりもっと岩みたいだった。牝鹿はあたりを調べ危険な獣を見つけることが出来なかったが、しかし牝鹿はなんとなく危険を感じており、そこから一歩も出て来ようとしないのだった。なにくわぬ顔で、鼻をあげて匂いをかいだり、横の灌木の葉をたべたりしはじめた。しかしその野鹿の群れはすでに運に見放されたようなところがあった。突然、朝靄が白く濃くたちこめている森林の中から、悪戯盛りで無鉄砲な若鹿が、たまりかねたように飛び出してきた。それが牝鹿のそれまでの努力を水の泡にしてしまった。ぞろぞろ次々に野鹿たちは森林の中から出てきて、そのあたりに散らばった。それで牝鹿は諦めて先頭に立ちトロットで岩の下を通り抜けだした。

太郎は無鉄砲な若鹿が飛びだしてきた折から、その若鹿にねらいをつけていた。その若鹿は牝鹿のすぐあとに歩いており、しきりにきょろきょろしていた。

太郎は漸く待ちに待ったチャンスを迎えた。そっと身をおこし、跳躍のため後肢をちぢめた。

しかし瞬間、太郎は跳躍しかけた体を前肢でぐっとふんばってとめた。岩の端から前肢におされて砂がぱらぱらとこぼれ落ちた。それでたちまち野鹿の群れは向う側の森林の朝靄の中へ一斉に逃げこんでいった。太郎は岩の上でそれさえ見ようとはしなかった。どこからともなくわが家に帰らなくてはいけない衝動がわきあがってきたのだった。それは飢えた時の帰心とはまったく別のものだった。完全に生れてはじめての帰心なのだった。家

でなにかがあったのである。一瞬太郎はくるりとむきを変え、わが家のある左手のほうの森林の中へ、まっしぐらに飛びこんでいった。

作爺は夜明け前の冷えこみがはじまるのと同時に、炉端のせんべい蒲団の中で目を覚す。ほとんど同時に表の縁の下の鶏小屋で一番鶏が鳴く。起きだした作爺は、蒲団を暗がりでたたんで隅へおしやると、雨戸を開け、それから炉端へ坐りこみ、榾松を燃やしはじめる。その明りで自在鈎の鍋の雑炊をあたためだすのだが、その日はいつもと違っていた。十月はじめのこの季節になると、二里半ばかり離れた日野川の上流のあたりへ羚羊や野鹿の群れがよく集ってくる。作爺にそのことを教えてくれるのは山の紅葉なのである。作爺の檜皮葺きの小屋から見える三国ケ岳の山麓の南面に紅葉がひろがりだすと、そろそろ野鹿の群れがあらわれはじめる。今年も作爺は山の紅葉に教えられ、二三日前から鹿狩りの支度にとりかかっていた。狩猟解禁日には、まだ二十日ばかりあるが、作爺にとってはむろん関係のない世界でのことなのであり、南の門入にも北の広野の部落とも十数粁も離れており、たとえ千発撃ったところでとがめる者もいなければ、銃声を耳にする者もいるはずがなかった。といって作爺は、そういう条件を利用して猟をしているわけではなかった。山の紅葉の教えに従うように、自分の老年の衰えた体力にしたがって、雪の訪れぬうちに仕事をしようとしているだけだった。

夜明け前に起きだした作爺は、暗がりの中をぶつかりもせず、たたきに下り、表戸を開けて表に出ると、風のしめり具合、その方角を調べ、それから夜空を仰いだ。雲一つない大きな星夜空を、ちらちらと仰ぐと、作爺はまた土間に入り、そこではじめてカンテラに火をつけ、かたちばかりの流しで、釜の米をとぎはじめた。今日と明日との猟の弁当をつくるためである。

釜の中の米をとぎ終るとそれを作爺はかまどへかけ、榾松(ほた)の枯松葉をおしこみ、それへ火をつけ、カンテラの灯を消し、またかまどへ薪を四本おしこんだ。作爺の動きは段取りがよくて、流れるような感じだった。しかし作爺は、目を覚してから、まだ一度も頭をつかっていなかった。獣たちが獲物を土の中へかくしたり、仔たちへ狩りのしかたを教えたりする時のように、なにも考えずに、流れるように必要なことを、つぎつぎにかたづけているのだった。今日は日本晴れだと一目でわかるような大きな星夜空を眺めた時でさえ、作爺はなに一つ思おうとしなかった。作爺は三十年ばかり前、ここに小屋を建てて住みつき、冬は竹細工をやり、あとの季節は猟をして暮してきたのだが、頭をつかわぬことの上に自分の人生をつくりあげてきた。いまは家族の一人のようになっている太郎にしても、最初なにげなく呼んだ名が太郎だったから、そういう名にしただけだった。そして太郎の仔が生れ、なんとなく牝を期待していたものだから、チヨと名づけただけだった。太郎が牝だから、仔どもが牡だから名を変えようなどとは、ただの一度も思ったことがなかった。作爺はものの名などまるで要らない世界に住んでいるのであり、自然そのものになる

道を進んでいるのだった。
しかし作爺は生憎人間なのであり、好む好まざるに拘らず、この世の中と係わりあわずに生きることは出来なかった。

その時、その作爺の小屋から五百米ほど下の杉の森林の中の岩かげで野宿していた三人の男達の一人が、用を足しに出て、ちょろちょろ昇る白い煙を見つけてさけんだ。
「煙だ、煙が見える」
まだ杉の森林の中は薄暗かった。そこに二十坪くらいの岩山があり、その岩かげに寝ていた二人の男のうちのがっしりした肩幅の男がはね起き、岩山の横へ飛びだした。そして斜面の上を指さしている男のとこへ駆けより、
「何処だ、龍次？」
と頂きのほうを仰いだ。彼のところからは落葉と枯れ草の斜面と杉の森林の枝の茂りしか見えなかったが、龍次のほうへそのまま寄っていくうち、夜が明け光りをたたえた湖のような空が、杉の幹と幹の間からわずかにみえ、それを背景にして白い煙がちょろちょろと斜めに昇っているのが見えた。
「サツじゃねえのか」
「サツが野宿するかよ」
「山狩りの連中かもな、兄貴」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c